

SAMPLE 試読用 サンプル

荒縄工房

あんぷらぐど著

縄味 1

S M 小説

SAMPLE 試読用 サンプル

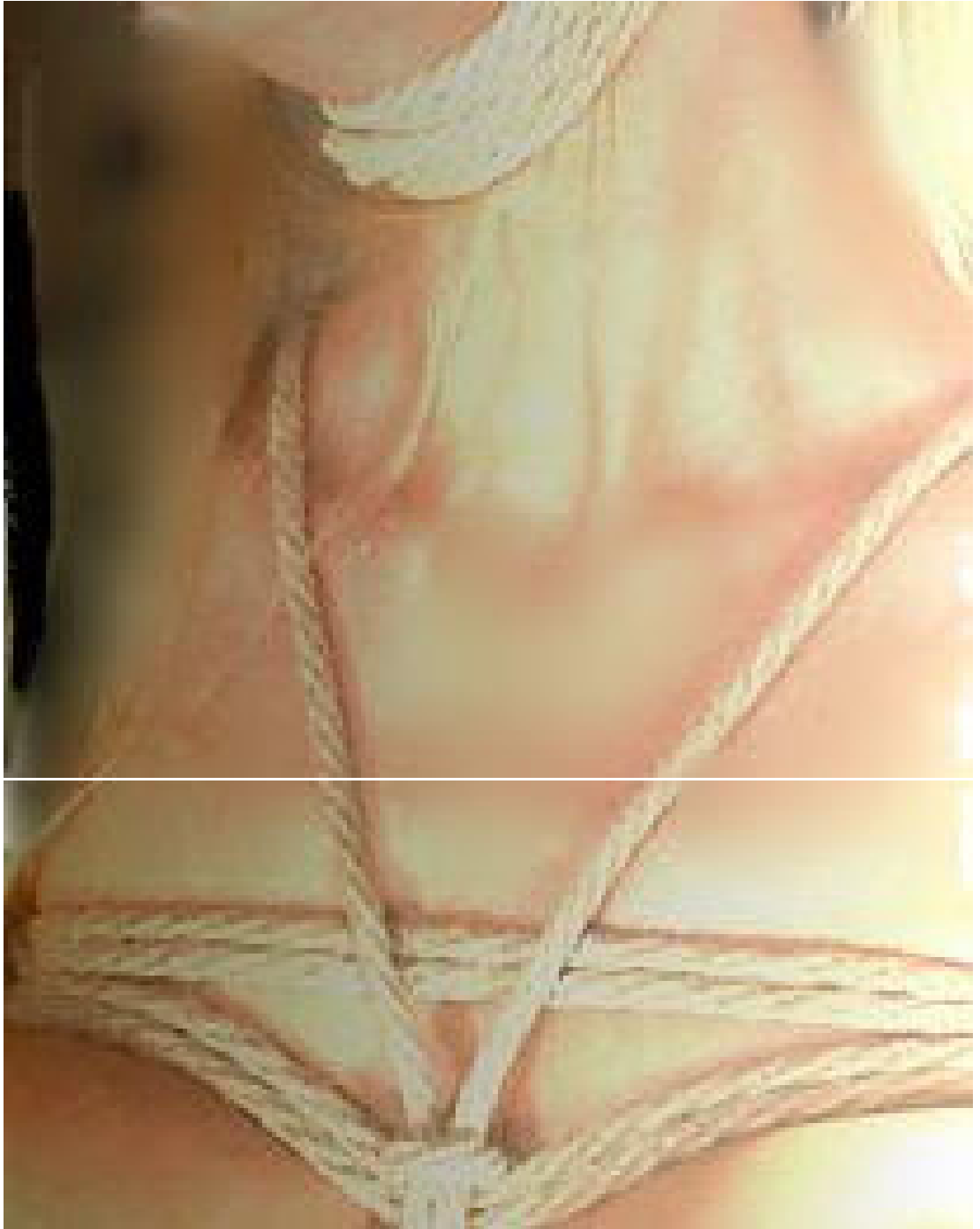
S
M
小説

縄味 1

あんぷらぐど著
荒縄工房



SAMPLE 試読用 サンプル



本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

あんぷらぐど

S M雑誌に「仲ゆうじ」名でS M小説を執筆して作家活動をスタート。その後、作家活動は休止し、編集の仕事に携わる。ネットでは「ふにやふにや」「あんぷらぐど」名でS M小説を執筆。独自の自虐的S M、一人称による告白形式の作品、伝奇S M小説などを発表し続けている。東京在住。

SAMPLE 試読用 サンプル

縄 奴 隷	外 出	義 兄	生 身	濡 れ る	感 じ る	初 縄	サ イ ン	指 縛	ス タ ジ オ	画 廊 に て	主 な 登 場 人 物
2	2	1	1	1	1	1	9	6	3	9	7
4	1	7	5	3	1	0	0	9	9	9	
1	0	8	6	5	3	2			9		

縄責め	2	7	5
水責め	2	9	5
吊り	3	0	6
異形	3	1	8
マリオネット	3	4	0
撮影	3	6	1
表情	3	8	2
奥付	4	0	3

主な登場人物

私 有森菜緒美^{な おみ} 二十七歳 大学時代から読者モデルの経験あり。大手メーカーに勤める夫とは展示会の仕事で知り合う。都内近郊のマンションに住む。

有森哲次 三十一歳 菜緒美の夫。大手メーカー勤務。

有森金男 三十三歳 哲次の兄。バイク事故によって下半身に傷が残っている。

吹雪清玄 五十歳 カメラマン。緊縛写真で知られている。商業写真の仕事もしている。

深川明 六十二歳 縄師。

赤岩陽介 三十五歳 深川の弟子を自認するが、本業

は日本画家。

喜美江 三十八歳 ホステス。元女優。緊縛モデル。

絵夢奴^{えむど} 二十二歳 緊縛モデル。

シエリー（反町美代） 二十五歳。ファッションモデル。菜緒美を姉貴と慕う読者モデル時代の友人。

画廊にて

「顔は出さないようにもできますから。少ないですがギヤラもお支払いしますし。場所はスタジオなので、ホントにモデルとしてだけなんですけども」

中年のニコニコしたおじさん。ベレー帽が怪しいですが、どうしてか、私に積極的に声をかけていただきました。

興味はあるのです。

なにしろ、この写真展にわざわざやってきたのですから。

ツイッターの裏アカウントで知った「緊縛写真展」。

行つたことのない建物ですが、買い物ついでに寄るのだから、と自分に言い聞かせて。

秋風がときおり吹き抜けるかと思えば、突き抜けた青空から夏を思い出させるギラツとした視線を投げかける太陽を感じたりもする、十一月にしては暑い日でした。

銀座で、にぎやかな表通りのすぐ近く。昭和を感じさせる、いまにも壊れそうな雑居ビルの中にギヤラリーはありました。

かつては事務所などが入っていたビルでしょうが、ほとんど画廊やレンタルスペースになっています。

中に入るとヒンヤリとした空気が流れ、ホツとしま

した。

ガタガタするエレベーターは怖そうなので、艶々の木の手すりがついている階段をのぼりました。

四階。少し息が切れます。

木のドアに、凹凸のついたガラスがはめ込まれています。廊下に比べると、室内は明るいようです。

ドアが閉じているので、ちよつと緊張しました。すると中から若い男女がニコニコしながら出てきて、普通な感じです。

彼らがドアを支えてくれたので、お礼を言って入りました。すぐに受付があり、女性に料金を払います。

狭い画廊でした。写真が四方の壁にぎっしり。中央

のソファには緊縛の写真集（販売しているのです）。飾りとして縄の束が置かれています。

直視できません。

モノクロの写真を順番に見ていきます。芸術的で、女性の顔ははっきり見えません。陰影が濃く、肌に食い込む縄の表情を浮き上がらせているようです。

目がそれほどよくないので、近づいて見るようになりますが、食いついているようでちよつと恥ずかしいです。

だけど、せつかく入場料を払ったのですから。

肉付きのいいモデルさんは、幾重にも縄でからめ捕られ、とても痛そう。

裸だけではなく、着衣の写真もあります。チャイナドレス、着物、下着、OLのようなブラウスとスカート。むしろ身近に感じてしまいます。

日常のすぐ横に、この世界はあるのです。

立って柱に。鴨居から吊られて。足を開かれて。裸に剥かれて。逆さに吊されて。廊下に寝かされて。檜の風呂で。庭の木々の間に……。

モノクロなので、黒く潰れている部分が多くて、どうなっているのかわからない写真もあるのですが、それは少し引いて見ると、なんともいえない気持ちを喚起させてくれます。

見に来たのに、見えないことがいい、というのもし

思議なのですけども。

どのぐらい見ていたのかわかりませんが、時間を忘れるほど夢中になっていたようです。

入ったときに三、四人ほどだったお客さんが、気づくと十人ぐらいに増えていて、突然、息苦しくなり、外に出てしまいました。

「はー、はー」

落ち着くまでしばらく荒い呼吸をしていました。

息苦しきは、部屋の狭さだけではなく、とても興奮してしまい、セックスにも似た快感がこみあげてきたからでしょう。

もちろん、似てはいても、まったく違うものです。

肉体の触れあいから生じる快感である前に、行為にいたる部分で感じる快樂があると思います。

そこには、普段しないことをする快樂とか、思うばかりで実行できない快樂がまざっていると思います。

女性が縛られている写真に囲まれた部屋に自分を置いてみる。それだけで、タブーを犯したような興奮を感じてしまっていたのです。

日常に戻れるでしょうか。このドキドキはいつまで続くのでしょうか。

もう一度、見たいのですが、出てしまったので、再入場はお金を払わないといけないかもしれません。

あの写真集にも興味があつたのです。その横の縄の

束にも。

結婚して四年。子どもはいませんが、写真集を持ち帰る勇氣はありません。

手に入れたら、違法かもしれないですが、スマホで写してどこかに捨ててしまおうというのはどうだろう、と思ったりしていました。

そういうことをするのも、よくないことをするようで、妙なトキメキを感じてしまいますが……。

夫は大手メーカーの技術者で、誠実でおもしろい人です。会社でも人気があります。東京ビッグサイトの技術展でコンパニオンとしてお手伝いしたことがきっかけで、お付き合いを二年ぐらいして結婚しました。

けっこう時間がかかったのは、夫の休日がほとんどないからです。

技術者は徹夜も多く、たまの休みはデートどころではなく、体を休めるために使うしかないので。最初の半年、そのことがよくわかりませんでした。月に一、二回会ううちにわかってきたので、その後は押しかけ女房のように、手料理を見よう見まねで作って、彼のアパートに届けるようになったのです。

だから、最初に手をつないだのも、キスをしたのも、そしてセックスをしたのも、全部彼のアパートでした。学生時代に戻ったような、退屈だけどいい思い出です。とても優しく、いい人で、その彼に「私を縛っ

て」とは、とても言えません。

いまも夫の部屋は、あの頃のアパートのように技術関係の本ばかりです。趣味も鉄道模型や自動車模型なので、その関連の本も、私から見ると、すべて同色に思えてしまうのです。

どんなことでも、専念している人はすばらしいと思う一方で、満たされていない気持ちもあるように思うのです。

贅沢なのでしょうか。

だいたい、彼のキャラクターで「縛ってあげよう」と言ったとしても、雰囲気台無しでしょう。私は笑ってしまい、彼は「冗談だよ」と言うしかないでしょう。

う。

いい人なので、ずっと一緒にいたいのですが、三年ぐらいたった頃から、退屈のあまりネットでいろいろな情報を見聞きするようになって、自分の中の隠れた欲望がしだいに大きくなっていきました。

満たされないもの。

それを探してはいけないと思いつつ、ネットの手軽さ、便利さから、どんどん検索をして、海外サイトにまでアクセスして……。

ないものねだりで、いっぱい情報を仕入れるようになっていました。

楽しい青春、楽しい仕事、そして恵まれた結婚。な

に不自由ない現状。悪い人に出会ったことがあります。酷い目にも合ったことがあります。子どもがいないという点を除けば、順調すぎる毎日。

これで人生はつつがなく終わっていくのかもしれない。

それでいいのかな。

いいに決まってるのですが、ちよつとした隙間を突くようにアダルトな世界にはまりこんで、怪しいブログなどを拝見しているうちに、つつい裏アカでツイッターまでするようになっていました。

ハンドルネームは大胆にも「なわ」。自分は人妻で毎日男たちに縛られている……。そんな妄想でつぶやく

のです。

これまでまったく知らなかった世界に身を置くこと。ちよつとした楽しさ。わずかな興奮。タバコやお酒のようなもの……。

マゾで男の人からいろんなことをさせられている女性たちのつぶやき、そして写真などを見ると、私にはとてもできないことですが、体が燃え上がってオナニーをしてしまうようになりました。

こういう人たちが本当にいるのではない、これは商売としての幻想ではないか。

そう思う一方、いてもいい。いなければ、私になろう、などと夢想して。ひとり興奮するのです。

「菜緒美。おまえを今日から私の奴隷にしよう」

顔の見えない男性に、ぎゅっと腕をつかまれて、私は身動きできなくなる……。

夫は、私とのセックスに飽きたのか、仕事が忙しすぎるのか、ただでさえ頻度が少ないのに、さらに少なくなってきたのも原因かもしれせん。

オナニーを日常化してしまい、その場所も寝室ではなく、トイレ、お風呂、居間、ベランダまで広げてしまっているのです。

妄想の世界をふくらませていくうちに、わずかな隙間だったはずが、かなり大きな空間になっていました。妄想はどんどん広がっていきます。空っぽで、表面

しかありません。中身を埋めるには、具体的になにかをしなければ。そこに身を投じなければ。オナニーだけでは埋まらない……。

ちよつと思ひ詰めていたようです。

どうしたら、この虚しさを埋められるのか。中身を埋められるのか。

このところ悶々としていました。

他人に身を任せることはできません。汚されるのはいやなのです。彼との生活が大事ですから。

犯されたいとか、お尻を開発してほしい、恥ずかしいことをされたい、というのは妄想の中だけのこと。

現実では絶対にできません。オナニー用の道具さえ

も買えないぐらいなのです。

こうして、できないことを捨てて行ったあとに残ったのが、縄でした。

汚されるのはいやですが、縄で縛られることを体験したい。誰かに縛ってほしい。

ぎゅつと、強く。

縛られたら体の自由がききませんから、実際には犯されたり汚されたりする可能性もあるでしょう。

都合のいい話ですが、肉体的な関係なしに、ただ縛られるわけにはいかないものでしょうか。

ネットでモデルを募集している人がいるのはわかっていますでしたが、いきなりは難しいです。

高校から大学にかけて、読者モデルをやっていたので、あの世界のことは少しは知っているつもりです。

いい面も悪い面も。

なんといつても撮影される快樂に慣れてしまったら、そこで表現する自分が幻だとはわかっていても、一番大切な自分になっていきます。撮られる自分であるために、二十四時間を費やすようになります。

しかも、仕事は自分の都合では得られないのです。楽しみがわかった頃に、はしごをはずされます。

きれいだから、かわいいからではすまない世界です。いつの間にか、自分は置いて行かれて、隅っこでおとなしくしていた目立たない子が、雑誌の表紙を飾り、

専属のスタイリストがつき、「カリスマ」と呼ばれ、テレビに出る……。

どうしてそんな差がついたのか、わかりません。

取り残されましたけど、私はそれほど未練はなかった。たので、すんなり考えを変えて、大学を卒業することに集中しました。

でも悔しかったんだと思います。細々とカタログのモデルや展示会のアルバイトは続けていました。

そんなときに、展示会のアルバイトで、彼と出会い、今度は結婚にまつしぐら。

読者モデルの世界は遠い過去の、ちよつとしたエピソードにすぎません。

でも、かすかに接点はありそうな気もします。

あの頃の名刺を見て、数人のプロカメラマンの名を思い出しましたが、でもやっぱり「縛って撮影してください」なんて言えるはずはないのです。

オナニーの幻想に登場してもらおうことはあっても。

これではいけない。どこまでも虚しいまま……。

だから、思い切って写真展を見に来たのです。

緊縛の写真ばかりの部屋に自分を置いてみたかったのです。

本当に自分はこの世界が必要なのか。

答えがわかると思いました。

現実はやっぱり疲れます。神経がくたくたになりま

す。買い物もやめて帰ろうかな。答えははっきりわかりませんが、考えるのはまたにしましょう。

そう決めたときでした。

ドアが開いて、中年のおじさんが出てきたのです。ベレー帽をかぶって。入り口にあったカメラマンの自己紹介を思い出します。写真展の作家である吹雪清玄さん。

ブログやツイッターを拝見しています。でも会ったことも言葉を交わしたこともありません。

「心配しましたよ。飛び出していったので、具合でも悪いのか、私の写真のせいか、と思ったもので」「い、いえ。大勢の方がいらっしやっつて、ちよつと息

苦しくなつてしまつて……」

「そうですね。私もですよ。あんなに来ていただけるとは思いませんでした。でも、あなたのような方に来ていただけると、本当にうれしいんです」

「え？」

「失礼ですけど、あなたはこの業界というか、そういう趣味の方ではないでしょうか？ そんなニオイがまつたくしませんね」

返事ができずに黙っていました。

「そういう人を探しているんです。なかなか出会うことがないものでね。募集をかけると、いかにもな人がいっぱいいきちやつて。人に頼んでも、シロウトさんは

このジャンルは敬遠されるから。たまにいらっしやるシロウトさんはこの世界のことを知らなすぎて、それも怖いし……。こういう写真ですから、無理やりつてわけにはいかないですからね」

私は思わず微笑んでいました。言い方がおもしろいのです。撮っている写真とのギャップが大きいというか。女を裸にして縛って写真を撮っておきながら。無理なこととはできないと。

「おかしいですか？ いやあ、まあ、そうでしょうね」

彼は名刺を取り出して私に押しつけました。

「失礼ですが、モデルをなさってらっしやるんでしょ

奥付

お読みいただき、ありがとうございました。

二〇一三年八月刊行 二〇一四年四月二版

著作権 あんぷらぐど (荒縄工房)

荒縄工房の情報は下記サイトへ

●ブログ「荒縄工房」

●ホームページ

●荒縄工房 S M 研究室

●今日も上機嫌ってわけないだろ

コメント、メッセージ歓迎。ご意見、ご感想、ご提案など随時、ブログで受付中。